

人は必ずなりたいたいものになる

人は必ずなりたいたいものになる。

これは、人間の一生を貫く厳然たる法則だと、私は考えている。

「そんなことはない。オレはなりたいたいものになっていない」と思う人もいるだろう。

だが、そうではない。たとえ、「なりたくないものになってしまっている」としても、じつは「なりたいたいものになってしまっている」のだ。

もう一度、いおう。人は必ずなりたいたいものになる。

また、これは「なりたいたいものになれる」という意味ではない。

だから、非常に厳しい法則なのである。

「なりたいたいものになれる」なら、話しかんたんだ。なりたいたいものが何なのか、自分でわかっていればいいだけのことである。命がけで夢見て、必死に努力を重ねることも、

それほど必要とされないということになる。

だが、そうではない。「なりたいたいものになる」というのは、人はどうしようもなく、自分になりたい方向に引き寄せられていくということなのである。

たとえば、「仕事のできる人間になりたい」と思っていたとしても、心のどこかで「なれなかつたらなれなかつたで、まあ、いいや」と思っていたら、仕事のできる人間にはなれない。「お金持ちになりたい」と思っていたとしても、「お金持ちにはいやな奴が多い」と思っていたら、けっしてお金持ちにはなれない。「海外に留学したい」と思っているも、「親が反対するからダメだろう」という気持ちが心のどこかにあつたら、親を説得して留学することはできないだろう。

つまり、現在のあなたの状態は、望むと望まざるとにかかわらず、あなたが心のどこかでイメージしていた姿を映し出しているということである。

ここで、私の場合を見てみよう。

経済学を専攻して大学院の博士課程を修了したくらいだから、「オレは学者になり

たいんだ」と自分では思っているつもりだったのだろう。

ところが、大学の非常勤講師になって、いずれは教授という肩書きが欲しいのかというところ、少し違う気がしていた。もちろん、論文をたくさん書いて、学界で認められたいという気持ちはたしかにあったが、そのためには指導教授に気に入られるような論文を要領よく書かねばならないだろうし、それで自分がほんとうに書きたいことを書けるとは思えなかった。

そんなとき、妻子を養う必要に迫られ、自分の夢とはまったく関係のない、予備校の講師になったわけだ。

すると、どうだろう。自分でいうのもなんだが、私はいつしか、人気講師と呼ばれるようになった。予備校の講師は実力主義の世界だから、人気があれば、当然、お金もたくさん稼げる。

おかげで研究のための本はいくらでも買った。本代に年間数百万円を散財することもある。置き場所に困った数万冊の蔵書を置いておくため、わざわざ自宅の隣の敷地まで購入し、書庫専用の家まで建ててしまった。

興味に引っかけられるものは、好奇心のおもむくまま、貪欲に勉強した。経済学、思想・哲学、文学、数学はもとより、古代史に、ジャーナリズム、ついにはコンピュータのプログラミングにまで手を染めてしまった。

語学は、英語、ドイツ語、フランス語、イタリア語、ロシア語に加えて、ギリシア語や中国語の勉強も始めている。

大学受験に失敗して、あやうく三浪しそうになったこの私が、いまでは予備校の人氣講師と呼ばれ、そのかたわら、これだけのことを実現できているのだ。

気がついてみると私は、なりたいたものになっていた。なりたい自分になっていたのである。

つまり、「人は必ずなりたいたものになる」という法則が、私には、望ましい結果になるよう働いたことになる。

なぜだと思えますか。

それはたぶん、「問い」を立てるのがうまかったからだと思う。

私はこれまで、じつにたくさんの「問い」を立て、その答えを見つけるため、この本に書いてきたようなことを実践してきた。受験勉強は得意ではなかったけど、本気で「問い」を立てて、自分という存在を賭けて、考えに考え抜いて生きてきたことだけは、たしかだ。

そしていまでも、答えが見つからない「問い」をたくさん抱えて生きている。

おかげで毎日が楽しくてしかたがない。

考え抜く人生を生きていくには、アタマの良し悪しは関係ない。

必要なのは、その「覚悟」があるかどうか。ただ、それだけだ。

それは、ラクな道のではないが、人生をおもしろくしてくれることはたしかだ。

さて、今度は、あなたの番である。

なぜなら、あなたはそのためこの本を買い、ここまで読み通してきたのだから。

最後に、もう一度、あなたに尋ねよう。

「あなたはこれから、どんな『問い』をもって生きていきますか」